

銀

賞

『凍み炭団』

凍み炭団（しみたどん）

島根県 出雲高等学校二年 内部 泰成

「寒さが凍みいなあ」

村の外れ、雪がしんしんと降る帰りの山道。十兵衛はかじかんだ手に白い息を吐いた。寒さよけのミノをはおつてはいるが、そこら中に穴があいて、時折ひゅつと雪が入ってくる。早いところ、新しいミノを調達しなくては。ずいぶん前からそう思っているが、中々できない。

十兵衛は、山奥で炭焼きをして暮らしている。冬のこの時期になると、もっぱら炭団を麓の村に売りに出て生計を立てていた。十兵衛の炭団は火持ちが良いからと村人たちの間でも重宝された。山を下りれば、炭団を買おうとする村人の列ができるほどだった。

しかし、それも昔の話だ。近頃は、どうやら外から行商が来るらしい。しかも、十兵衛よりべらぼうに安く炭団を売っているという噂だ。当然ではあるが、十兵衛の方はというと、とんと炭団が売れなくなってしまったのだった。

今日も変わりはない。あぜ道を歩いていると、通りすがりの母子に出会った。十兵衛は「炭団は要らんですか」と声をかけようとしたが、その母親は露骨に嫌そうな顔をこちらに向けて、足早に去っていった。またある老婆は、炭団こそ買え、ぶつきらばつに「三つ」と言つて、炭団をひっかくように掴み取ると、投げつけるように銭をバラ撒いていった。

十兵衛は村人たちのあまりの変わり様に戸惑^{とまど}っていた。行商の炭団が安いといえど、十兵衛は自分の炭団に誇^ほりを持っていたからだ。火持ちの良さでは他のどんな炭団にも負けない。そう思っていた。しかし、現実^{じゆんじつ}は厳しかった。以前と変わらず十兵衛からいつも炭団を買ってくれるのは、とうとう村の庄屋^{しやうや}さんだけになっていた。庄屋さんだけは「昔からの付き合いだから」と、十兵衛の状況^{じやうきやう}を知^しつてか知らずか、十兵衛の持^もつてきた炭団はごっそりと買^かつていってくれた。ただ、そう何度も庄屋さんのところに行けるわけもないし、買^かい値^ぢもそこまで良^よいと言^いえるほどではなかった。結局のところ十兵衛の生活は貧^ひしいままなのであつた。

やつとのことです重^{おも}い足を上げ、十兵衛が山頂^{さんてい}の掘^ほつ立て小屋^{こや}に辿^{たど}り着^きいた頃^{ころ}には、辺^へりはすっかり暗^くくなつていた。

「はあ、大分遅^{おそ}くなつたわ。早くこと炭団に火^ひい点^{てん}けんと」

十兵衛は呟^{つぶや}いた。細々と枝を伸ばす木々が何とも寂^{さみ}しい雰^{ふん}囲^い氣^きをたたえる。こんな寒い冬の夜は炭団の火で温^ぬまるのが一番だ。

十兵衛が小屋の戸に手をかけた、その時。後ろの茂^{しげ}みで、がさがさと音がした。振^ふり返^{かへ}つて目を凝^こらすと、そこには一匹^{いっぴき}のたぬきの姿があつた。

「おお、兵吉^{へいきち}！ おつたかや」

十兵衛は嬉^{うれ}しそうに声を上げた。兵吉も、むくりと立ち上がると、まるまると大きな体を揺^ゆらして、十兵衛のもとに駆^かけ寄^よつた。

「寒^さかろう、寒^さかろう。今から炭団の火^ひい点^{てん}けけん、ほれ、入れ入れ」

十兵衛はそう言^いつて戸を開^{ひら}けた。兵吉は頭^{あたま}をもたげて、のそりと小屋に足を踏^ふみ入^いれた。

十兵衛が兵吉と出会ったのは麓の村から帰る道中でのことだった。兵吉が山道で、足を怪我して歩けないでいるところを十兵衛が見かけたのだ。恐らく村人の誰かに蹴か何かで殴られたのだろう。かわいそうに思った十兵衛は兵吉を家に連れ帰り、怪我の手当をしてやった。腹をすかせている風だったのでさつまいもを分けてやると、兵吉は喜んでかぶりついた。そんなことがあってから、兵吉は十兵衛のもとによく顔を見せるようになった。「兵吉」というのは、十兵衛が自分の名前から「兵」の字を取って付けた名前だ。十兵衛は、それはもう、目に入れても痛くないほどに兵吉を可愛がったのだった。

「今日も炭団は五つしか売れらんだつたよ。新しいミノは当分お預けだの」

十兵衛は火鉢に炭団をくべながら苦笑いして言った。兵吉は目をパチクリとさせて、十兵衛に頭を擦り寄せた。「兵吉、お前はほんにかわええのお」

十兵衛はそつと兵吉の頭をなでた。兵吉の頭はふさふさで柔らかかった。

幾分か経って、十兵衛は火箸を手にとった。灰を崩すと、中から煌煌と燃える炭団が顔を出した。炭団はじんわりと辺りを真紅に染めていく。ああ、炭団の色はいい。いつ見てもうつとりする。十兵衛は思った。膝の上の兵吉に目をやると、十兵衛と同じようにぼんやりと炭団の火を眺めていた。

なんて幸せな時間なんだろう、と十兵衛は思った。膝上の兵吉の温もり、炭団の静かな温もり。その両方が、疲れ切った十兵衛の心を癒してくれる。永遠にこのまま、この温もりが続けばどんなによいだろう。十兵衛はほのかな温もりを感じながら、やがて深い眠りに落ちていくのだった。

翌朝、十兵衛は畳の上で目を覚ました。兵吉の姿はもう無く、炭団も火鉢の中で灰に埋もれていた。

十兵衛は顔を洗って支度をする、すぐに山を登った。昨晩はかなり雪が降ったようで、戸を開けると外は一

面真っ白に覆おほわれていた。この前雪ぐつを出しておいて良かった、と十兵衛は思った。

冬の冷たい風が顔に当たると、妙な心地良さがある。山道を歩きながら、十兵衛はどこかすっきりした気分を感じた。……ただ、今日も一つ思うところがあるとすれば、干していた炭団が少なくなっていたことだろうか。

十兵衛はいつも火鉢のそばに作った炭団を干している。山を下りるときはそれを竹籠たけかごに積み込むのだが、どうもこの頃、その炭団が減っているように感じるのだ。もちろん気のせいかもしれないし、減っていたとて、兵吉がいたずら心で盗とつていったのだろう。どうせ売れないだし、少々減つていても別にいいか、と十兵衛は気にしないことにしていた。

麓の村はどこか活気立っていた。年の瀬せが迫せまっているからだろうか。百姓ひゃくしょうにとつて休みといえど正月三が日くらいのものだし、新年が来るとなると誰だれしも気がはやるのだろう。

十兵衛がいつもの道を歩いていると、何やら賑にぎやかな声が聞こえてきた。何だろうかと思つて声の方へ近づいて見ると、路肩ろかたに人だかりができています。

「はあ、あれが噂の行商か」

十兵衛は立ち止まつて言った。人だかりの大きさからしても、噂通り流行っていることが分かった。十兵衛も行ってみようとした、その瞬間しゆんかんである。人混みの中から、すっと黒い影が飛び出した。十兵衛は、一瞬それが何だかよく分からなかったが、その影を見て絶句した。その影は十兵衛のよく見知った顔だったのだ。

「兵吉!! どうしてお前が……」

そう、影の正体は兵吉だったのだ。兵吉は十兵衛に気づいていないようで、十兵衛の方には脇目わきめも振らず、山の方に忽然こつぜんと消えていった。

つい昨晚身を寄せ合ったはずの兵吉が、どうしてここにいるのか。十兵衛の商売敵とも言える、この行商のところに……。十兵衛の中で不穏な思いが渦巻いた。十兵衛は呆然と立ちすくんでいたが、しばらくしてぐっと拳を握りしめ、人混みの中へ向かった。とにかく行商のもとに行ってみないことには始まらない。そう思ったのだ。「へい、買つてらっしゃい、見てらっしゃい。ここには何でも揃つとござ」

行商は若い男だった。男の言う通り、路肩にはいろいろな品が置いてあった。薄皿、木桶、木綿布……確かに生活に必要なものはみんな手に入れられそうだった。村人たちに人気なのも分かるな、と十兵衛は思った。

品物を見渡してみると、木桶の隣にやはり炭団の山があった。十兵衛は前に恐る恐るやって来て、炭団を一つ手に取った。

「違つな……」

炭団は、ごく普通の炭団だった。十兵衛は、気の抜けたように胸を撫で下ろした。

「炭団を買いに来られたんですかい？」

その時、行商の男が十兵衛に話しかけてきた。

「え、いや……」

急なことで返事に窮した十兵衛に、男は続けた。

「そんなら、まずこちらの炭団を試しに差し上げますよ。使ってみて、良かったらまた買ってください」

男はそう言つと、奥から炭団を二、三個取つて十兵衛に渡した。十兵衛は再び言葉を失った。重厚な質感に、きらりと輝く黒色。それは正真正銘、十兵衛が作った炭団だったのだ。やっぱりか、という思いが全身を貫いた。

「これは、おらの作った炭団でねえか」

十兵衛の口からそう漏れた。

「え？」男の顔から笑みが消えた。

「聞き捨てならんな、お客さん。そりや一体どういふこと？」

男は語気を強めて言った。

「お、おらは近くの山で炭焼きをしとるもんだ。色形見ても、この炭団は間違はなくおらが作ったもんだ」

十兵衛は負けじと返した。

「ほお、この炭団はあんたが作ったもんだと。そこまで言うんなら、ちゃんと証拠があるんだろうな？ 色形なんかじゃなくて、誰が見ても分かる証拠だよ」

男の言葉に十兵衛はぐっと押し黙った。手間ひまかけて炭団を作っている十兵衛にとっては自分の炭団を見分けるなど、造作も無いことだ。しかし証拠を出せと言われると、それは出しようがない。

「無いだろう？ でたらめ言って妨害しようつつてもそれはいかねえ。迷惑だ、さっさと帰るんだな」

男は鋭く言い放った。周りにいた村人も、陰険な視線を十兵衛に向けていた。十兵衛には、もう対抗する術は無かった。村人たちの嘲笑を背後に感じながら、十兵衛は来た道を引き返すのだった。

しかし、行商の男が差し出した炭団は間違いなく十兵衛のものであった。恐らくは、「お試し」で火持ちの良い十兵衛の炭団を村人に渡し、それ以降は普通の炭団を売る算段だったのだろう。そうやって行商は村人たちに炭団を売りつけていたのだ。

どうして兵吉が行商のところにいたのか。その答えも、もはや想像ではなく確信に近かった。きっと兵吉もその行商の手先だったに違いない。十兵衛の目を盗んで炭団を行商のもとに届けていたのだ。いつも炭団が減って

いるような気はしていたが、そうか、そういうことだったのか。十兵衛の中で悶々とした感情がぐるぐると駆け巡った。

十兵衛は腹わたの煮えくり返るような思いだった。昨晚も一緒に炭団の火に当たっていたというのに。兵吉は、自分の味方だと信じていたのに。……そうではなかったのだ、自分は騙されていたのだ。十兵衛の頬を一筋の涙が伝った。

やつのことで十兵衛は山の上に辿りついた。歩いていくと、視線の先に、小屋の前に立つ黒い影が見えた。兵吉だった。兵吉は十兵衛の姿に気付くと、ゆっくりと近づいてきた。

いつもなら十兵衛は「兵吉!」と叫んで駆け寄るところだ。だが、今日は違った。十兵衛は、黙って背中のかたまりに手を伸ばした。そして、炭団を手に取り、兵吉に向かって思いきり投げつけた。

「お前はおらの味方だと思っとった。んだども、違ったんだのう、兵吉。お前は、ハナから行商の手先だったんか!」

十兵衛は怒鳴った。胸にこみ上げてくる熱いものを抑えられなかった。

炭団は、兵吉の足をかすめた。兵吉は思わず真上に跳ねた。

「もう二度と、顔を見せるな!」

十兵衛は声を振り絞って言った。

兵吉は目をパチクリと開けて驚いたような顔をしていたが、やがてもの言いたそうに十兵衛の顔を見上げた。が、十兵衛が再び籠に手をかけると、きつと踵を返して吹雪の中に消えていった。

十兵衛は帰ってから炭団の火を点ける気にはならなかった。それどころか、炭団を見るのさえ嫌だと思っ

た。炭団を目にすると、つい胸が詰まって苦しくなってしまうのだ。

十兵衛は思い立ったように立ち上がった。雪づつに足を入れ、炭団でいっぱいの竹籠を背負った。この炭団は庄屋さんにあげてしまおう。そんなもって、もう炭団を作るのは止めによろしく。十兵衛はそんなことを思いながら戸を開けた。しばらく止んでいた雪が、再びちらつき出していた。

山を下るのにそんなに時間はかからなかった。十兵衛は庄屋さんのお屋敷の前に来た。屋敷は茅葺きの見事な造りで、手入れされた梅やら松やらが雪をまとってなんともきれいだ。

十兵衛はそつと門をくぐり、玄関の戸に手をのばした。そのときだった。戸の奥から人の話し声が聞こえた。「……うむ、占めて銀十奴じゃな、今月の分しかと頂いた」

一人の声は庄屋の爺さんのもののようだ。十兵衛は耳を戸にあてて、息を潜めた。

「いえいえ、いつも炭団のことでお世話になっていますから、銀十奴じゃあ、安いくらいですよ」

相手の声に十兵衛は思わず声を上げそうになった。声の主はあの行商の男だったのである。十兵衛は目の前が真っ暗になるような気がした。どうして行商がここにいる。「いつも炭団のことでお世話になっている」とは一体どういうことだ。庄屋さんがずっと自分から炭団を買ってくれていたのは、まさか……。

行商の男は続けた。

「そつえば、あの炭焼きの男が今日来た話はさつきしましたけどね、その前に変なたぬきも来たんですよ」

「ほう、たぬきかね」

「ええ、ちょうどその時は客に例の炭団を渡そうとしてたんですがね。そこにそのたぬきが入ってきて、炭団を取ろうとしてきたんで」

行商の言葉に、十兵衛は自分が大変な勘違いをしまつていたことに、ようやく気付いた。あの時、兵吉は行商に炭団を渡していたのではなかった。十兵衛の炭団を目にして、それを行商から取り返そうとしていたのだ。「あんまりしつこいんで蹴り飛ばしてやったら、逃げていきましたけどねえ」

「炭団なんて欲しがるとは、そりゃあまた馬鹿なためきがおつたもんだな」

庄屋と行商の二人はケタケタと笑った。

十兵衛は気づけば、山道へ駆け出していた。居ても立つても居られなかった。十兵衛は、己の勘違いを悔やんだ。どうして兵吉が行商の手先だと決めてかかつてしまつたのだろう。兵吉は十兵衛のために炭団を取り返そうとしていたというのに、自分は兵吉に何をした？ 炭団を投げつけ、怒鳴り散らし……。十兵衛はもの言いたげに自分を見上げた兵吉の顔を思い出した。きっと兵吉は、自分を見損なつてしまつただろう。当然だ。自分はそのだけのことをしてしまつたのだ。兵吉は本当に唯一の友だつたというのに。

山を下るときは止んでいた雪は、今や吹雪となつて十兵衛に襲いかかる。十兵衛は、雪粒が顔に打ち付けるのも気にせず山道をひたすら上り続けた。

十兵衛は兵吉に申し訳ない思いでいっぱいだった。ただ、やはり一つ気がかりなのは、小屋の中の炭団が減つていたことだ。十兵衛以外に小屋に入れたのは兵吉だけだ。当然、炭団が少なくなっていたのは兵吉の仕業に違いなかった。でも、一体なぜ。行商に持つていったわけでないなら、一体兵吉は炭団をどこに持つていったというのか。

十兵衛が山頂の小屋に着いた時、そこには誰の姿も無かった。代わりに、白い雪の上に、今にもかき消されてしまいそうな足跡があつた。それは少々変な形の足跡だった。片側だけ妙に細長い形になっているのだ。それが

何重にも重なって、森の方へ続いていた。

十兵衛は迷わず、足跡を追って走り出した。きつとこの足跡が兵吉のもとに連れて行ってくれる、そう信じて。足跡は十兵衛がやっと一人通れるくらいの獣道けものみちを延々と続いていく。何度も木々の枝が十兵衛の邪魔じゃまをした。吹雪も強くなるばかりであった。

いつしか、道といえるような道はもう無かった。十兵衛はただ足跡だけを頼たよりに、吹雪の中を、森の奥へ、ひたすらに走り続けた。走りながら、叫こゑばずにはいられなかった。「兵吉、兵吉」と。

足跡はついに、小さな洞穴ほらあなの前で終わった。十兵衛は、身をかめて穴に入った。そして、言葉を失い、へなへなと膝をついた。

「兵吉、そんな……」

十兵衛の目の前で、兵吉はもう冷たくなっていた。すぐそばには炭団がいくつも転がっていた。真つ黒なままの、氷のように冷たい炭団だった。

「馬鹿だな。火いつけてないのに、あつたかくなるわけないだろ」

十兵衛の声は震ふるえていた。

兵吉の後ろ足に目をやると、恐らく十兵衛の炭団が当たったであろうところが不自然にへこんでいるのが分かった。十兵衛はおかしな形の足跡を思い出した。十兵衛が山を下りている間、兵吉はけがを引きずりながらも、何度も何度も小屋までやって来たのだろう。十兵衛を探して。そしてついにここで力尽ちききてしまったのだ。

十兵衛の目から涙が溢あふれた。

「ほんとに馬鹿だよ、おらは。兵吉は、また来てくれたのに。おらは……」

続きはもう声にならなかった。十兵衛は兵吉の上に突^つ伏^ぶして嗚咽^{おえう}を漏らした。

十兵衛にとつてそうであつたように、兵吉にとつてもまた十兵衛は唯一の友だつたのだらう。兵吉にとつても、十兵衛と炭団に身を寄せた時間は幸せなものだつたのだらう。なぜ兵吉が炭団を何度も洞穴に持ち帰つたのかも、今の十兵衛には痛いほど分かつた。

外の二つの足跡はこの吹雪ですっかり消えて、無くなってしまった。穴のなかでは十兵衛の悲しい、悲しいむせび声が、冷たい炭団に静かに響^{ひび}くだけであつた。